

於市乃方 仄起七言絶句 下平声七陽韻

満院青苔冷月光

まんいん せいたい げっこう ひや  
満院の青苔 月光 冷やかなり

人生難計涙成行

じんせい はか がた なみだ こう な  
人生 計り難し 涙 行を成す

勝公歌舞君休問

しょうこう かぶ きみ と や  
勝公の歌舞 君 問うを休めよ

心母身妻於市方

こころ はは み つま おいち かた  
心は母 身は妻となる 於市の方

平成十年五月 二見 光耀

字解

満院は勝家公の菩提寺西光寺の庭一面。 涙成行は勝家公、お市方の墓前に立つと戦国の世とは云えこの世の儚さに涙を禁じえない。 勝公歌舞は勝家公は勝家公。勝家公はこの世の名残に、お市方の笛に合わせて嘗て信長公が舞ったあの「人生五十、下天のうちにくらぶれば、夢まぼろし如くなり」を心静かに歌い、舞いました。

意解

勝家公と、お市方の御精霊は菩提寺である西光寺に安すらかに眠って居られ、庭一面の青い苔、そして月の光も今夜は心なしか冷ややかに感じられます。 人生とは不可思議なものであります。戦国武将の宿命とは云え、嘗ての配下に刃を向けられた勝家公、又信長公の妹として生まれながら、兄と同じ非業の最後を遂げたお市方を思うと涙がとめどなく流れてなりません。 瀬ヶ岳の戦いに敗れた勝家公と共に、お市方は落城を前に心静かに酒を酌み交わし、最後の舞を舞うことになりました。 しかし、可愛い娘達と別れて勝家公とあの世へ旅立つ心境はいかばかりであったあつたことでしょうか。 私達は改めて勝家公の遺徳を偲び、その遺徳を後世に伝える事を願ってやみません。